国立国語研究所学術情報リポジトリ

Notes on studies using newspaper clippings of articles related to the Japanese language

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 優, 池田, 理恵子, 辻野, 都喜江, INOUE, Masaru, IKEDA, Rieko, TSUJINO, Tokie メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001146

国立国語研究所報告107 研究報告集15 (1994)

国語研究所所蔵新聞記事を利用した研究について（覚え書）

井上　優

池田　理恵子

辻野　都喜江

INOUE Masaru, IKEDA Rieko, TSUJINO Tokie : Notes on Studies Using Newspaper Clippings of Articles Related to the Japanese Language

要旨：国立国語研究所では昭和24年から「ことば」に関する新聞記事を収集し，『新聞所載国語関係記事切抜集』（『切抜集』）として図書館に所蔵している。また，『切抜集』所収の記事に関する基本的な情報を入力した『国語関係記事台帳』（『台帳』）を現在作成中である。

本稿では，まず1.で新聞記事を資料とした研究に関する概略について述べ，次に，2.と3.で，新聞記事を資料とした「日本人のあいさつ・漢字に対する意識」に関する初歩的な事例研究を紹介する。

キーワード：新聞記事，データベース，日本語，国語，あいさつ，漢字

Abstract: The National Language Research Institute (NLRI) has been making a "Collection of Newspaper Clippings of Articles related to the Japanese Language" (CNC) since 1949. The basic information of each article is input to a "Database of Newspaper Articles on Japanese" (DNAJ) (work currently in progress).

This report consists of three sections. Section 1 presents an outline of the study using CNC and DNAJ. Section 2 and 3 demonstrate preliminary case studies on Japanese peopele's consciousness of Greetings and Kanji.

Key Words: newspaper articles, database, Japanese language, Greeting, Kanji

0. はじめに

本稿は，情報資料研究部第一研究室が1992年度から文部省科学研究費「「国語研究所新聞記事データベース」の作成と活用に関する研究」（一般研究A，代表：斎藤秀紀）の補助を受けておこなっている研究の中間報告である。

井上・辻野（1992）「「国語関係新聞記事データベース」について（中間報告）」（『国語研究所研究報告集13』）でも述べたように，国立国語研究所では昭和24年から「ことば」に関する新聞記事を収集し，『新聞所載国語関係記事切抜集』（以下『切抜集』）として図書館に所蔵している。今回，科学研究費の補助を受けておこなっているのは，（ⅰ）『切抜集』所収の記事すべてに関する基本的な情報をおさめたデータベース『国語関係記事台帳』（以下『台帳』）の作成を継続するとともに，（ⅱ）『切抜集』及び『台帳』を資料とした研究，あるいは『台帳』をより充実したデータベースに発展させるための研究をおこなうことである。（『台帳』の形式は井上・辻野（1992）で報告した内容を若干変更した。いずれくわしく報告する予定である。）

『台帳』そのものは現在作成途上の段階にあるが，今回の中間報告では，上にあげた課題(ⅱ)に関して，現時点で筆者らが考えていること，あるいはすでに着手していることの概略を述べる。執筆の分担は以下のとおり。

はじめに，第1節　井上　優　（1992年4月より日本語教育センター第一研究室）
第2節　池田　理恵子　（1992年4月より情報資料研究部第一研究室）
第3節　辻野　都喜江

1. 新聞記事を資料とした研究について（井上　優）

まず，『切抜集』の資料としての性格について簡単に述べておこう。

『切抜集』は，その名が示すとおり，本質的に“scrap book”であり，それ以上のものではない。つまり，文法研究における用例カードと同様，「こういう内容の例があった」ということ以上の情報は含まない，というタイプの資料である。

記事の収集基準は，基本的に「ことばに関する記事」というだけで，それ以外の細かな基準は設定されていない。また，特定の研究テーマを念頭において記事が収集されているわけでもない。（もちろん，特定のテーマ（例えば漢字問題）に関する記事が一定の時期に集中して現われたような場合は，そのテーマに関する記事が重点的に収集されたということもあろう。）記事の収集範囲や記事収集の対象とする新聞の数や種類も，時期によって多少変動がある。（全国紙を基調にしていることはかわりないが，時期によっては全国紙の地方版，地方の有力紙や業界紙も記事の収集対象となっている。）

つまり，サンプリングのあり方が重要な意味を持つ計量的研究のための資料として『切抜集』を利用することにはほとんど意味がないが，「何らかのテーマを設定して記事を検索し，検索した記事の内容から何かを発見する」というタイプの研究であれば，資料作成の目的や資料の作成過程によって研究テーマが制限されるということはない。「研究テーマを待っている」というのが scrap book としての『切抜集』の基本的な性格である。

さて，現在おこなっている『切抜集』を利用した研究は大きく二つの柱からなる。

Ⅰ：『切抜集』を有効に活用するための研究

Ⅱ：「新聞記事」を資料とした社会言語学的研究

Ⅰには，新聞記事の保存法，データベース化の方法などの技術的な問題も含まれるが，何といっても重要なのは，

言語研究者としての視点を生かす形で記事の検索ができるようにするにはどうすればよいか

ということである。つまり，一般の汎用新聞記事データベースとはひと味ちがう「ことばの研究のためのデータベース」として『切抜集』を位置づけるためには，それぞれの記事にどのような内容の情報（キーワード）をどのような形式で付加すればよいか，という問題である。

先に述べた，『切抜集』のデータベース化のひとつの試みとしての『台帳』には記事の「見出し」に関する情報が含まれており，テーマによっては見出

しだけでもかなりの確率で記事を検索することが可能なようである（第2節参照）。しかし，新聞記事の場合，「天声人語」や「編集後記」のように見出しがないケースも多い。（『切抜集』では収集者の方で適宜見出しをつけていることもある。）また，読者の注意をひくために一風かわった見出しがつけられているケースや，記事の主題そのものはことばとは無関係だが一部ことばに関する記述もあるというケースでは，見出しはほとんど無意味である。

また，汎用新聞記事データベースのキーワードをそのまま利用することも，「ことばの研究のためのデータベース」としての『切抜集』の場合はあまり適切とはいえない。汎用データベースでの検索については一度簡単な実験をおこなったことがある。その時は，いくつかのキーワードを指定しておけばそのキーワードがついた記事が毎朝ファクスで送られてくるというシステムであったが，ごく限られたキーワードでしか検索できなかったこともあり，自分たちで切り抜いた記事と送られてきた記事とは予想以上に一致しなかった。（もっとも，国語審議会関係の記事のようにテーマによってはかなりの確率で検索できるものもあるだろうから，今後さらに実験する価値はある。）まして我々が自ら『切抜集』を使ってことばに関する研究をしようとすれば，やはり自前でキーワードを付加する必要があるだろう。（このことは，ある意味では「他の新聞記事データベースとのリンクを必ずしも前提にしない」ということにもつながる。）

現在のところ，キーワードの内容については二つの方向から検討をすすめている。ひとつは「一定の分野に関する記事を大まかに検索する」という分類的な方向からの検討であり，もうひとつは「特定の研究テーマを念頭においたきめ細かなしぼりこみ」という方向からの検討である。

前者の方向においては，具体的な研究テーマからは一応独立した形で一般論として検討をおこなうことが可能であるが，後者については，一般論の形で議論することは難しく，実際に具体的な研究テーマを設定して記事にキーワードをつけていくという作業をやってみないとわからないことも多い。(第

3節で述べることはそのひとつの試みである。）筆者自身は，すべての記事について同じような密度でキーワードを付与する必要はなく，また，テーマによっては，研究をおこなった副産物としてキーワードが付加されるということもあってよいのではないかと思っている。いずれにせよ，キーワードについては，最終的に「大まかな検索」と「きめ細かなしぼりこみ」の二つをどのような形で調和させていくかということも念頭におきながら検討を重ねる必要がある。

次にⅡについて述べる。

新聞記事の切抜きの活用のし方には二つのタイプがある。ひとつは「今の社会の流れを見る」という時事評論的な活用のし方であり，もうひとつは「過去からの社会の流れを見る」という歴史研究的な活用のし方である。『切抜集』がその本領を発揮するのは，いうまでもなく，後者のタイプの活用法である。

新聞記事を用いた社会言語学的な歴史研究のテーマとしては，例えば次のようなものが考えられるだろう。

①戦後の日本人（あるいは日本の社会）にとって，「日本語」あるいは「ことば」とはどのような価値をもつ存在であったのか？

②日本の社会において言語問題（国語問題）というものがどのような問題として意識されてきたのか？

もちろん，新聞というメディアの特性や「記事選択に際しての新聞社の配慮」ということは無視できないが，社会における「ことばに対する価値観」や「言語問題に対する意識」，また「言語に対する関心のあり方」や「言語研究（言語研究者）に対する認識」といったことの一端が新聞記事に反映されるということは，さしあたり認めてよいことだと思われる。

ことばに対する価値観は昔と今とでずいぶん違っているところもある。方言に対する社会の処遇の変化，手紙や履歴書の（筆記具・書式などを含む）「正しい」書き方に対する意識の変化はその典型であろう。新聞記事にもそのことははっきりと現われている。（ちなみに，筆者は1962年の生まれであ

るが，履歴書が毛筆縦書きだったのがペン横書きに改められたこと，またその際いろいろな反響があったことを『切抜集』を見てはじめて知った。）

しかし，その一方で，『切抜集』をながめるかぎり，言語問題（必ずしも国語問題とはかぎらない）として意識されていることがら，あるいは言語に対する関心のもち方は昔も今もそれほどかわっていないという印象も受ける。事実，投書記事で問題にされる内容は昔と今とではあまりかわっていない(第2節参照）。

ことばをめぐって何がかわり，何がかわっていないのか，かわったとしたらどうかわったのか（例えば，外国人に対する日本社会の対処のし方はどれだけかわったのか，「正しい（乱れた）日本語」に対する意識はどれだけかわったのか...）ということは興味深い問題であるし，少なくとも『切抜集』はそのことを考えるためのひとつの手がかりは与えてくれるように思う。

2. あいさつと感謝・詫びに関する意見—1970年代の新聞記事より—

（池田　理恵子）

2.1. 「国語に関する世論調査」と『切抜集』からの資料収集

本節では，新聞記事を資料とした社会言語学的研究のひとつとして，新聞によせられた読者の意見を中心に，1970年代のあいさつ及び感謝・詫びに関する意見や関心のあり方をみていくことにする。

あいさつとは何か。日常生活の中で「あいさつをちゃんとしよう」「丁寧なあいさつをしよう」という言葉を耳にすることがある。これらの言葉は，適切なあいさつを身につけ，使用できるようになることを求めているが，「丁寧な」あいさつを「ちゃんと」するとはどういうことであろうか。

1992年に総理府が実施した「国語に関する世論調査」によると，「今の国語は乱れていると思う」と答えた人は全体（有効回答数2,284人）の74.8%にのぼる（総理府1992）。乱れていると思うと答えた人（1,708人）が乱れているとした主な点には，「話し方」（72.4%），「敬語のつかい方」（67.3%）に次いで「あいさつの言葉」（51.9%）が挙げられており，あいさつ

に対する関心が高いことがわかる。

あいさつに関する調査研究としては，あいさつをするか，いつ，どのようなあいさつをするかなどに関する日独比較（国立国語研究所1984）や，ある時点での大規模な意識調査などがある。しかし，ある程度長期間にわたる，あいさつに関する意識（の変化）を調査したものはない。

新聞記事，特に投書記事には，読者のことばに対する価値観や関心のあり方などが何らかの形で反映されるだろう。そして，『切抜集』は戦後45年という長い期間を視野に入れた言語意識をみることのできる貴重な資料である。『切抜集』所収の記事に関する基礎情報（日付・掲載紙名・見出し等）を収録したデータベースである『台帳』は現在作成中であるが，今回は作成済み『台帳』のうち特に1970年から1980年の記事を対象として，あいさつ及び感謝・詫びに関する記事を検索・収集した（1980年の記事も含んでいるが，便宜上，1970年代と呼ぶことにする）。あいさつは『国語学研究事典』では，「人間が他人との間に親和的な社会関係を設定するために，または，すでに設定されている親和的な社会関係に基づいて，それを維持強化するために行う社交・儀礼的な行動様式の一つ」と定義されている。ここでは，あいさつを社会関係の潤滑油的な働きをする定型として，感謝・詫びと一緒に考えた。

検索の対象とした記事は次の二種類である。（1）『台帳』作成段階で臨時的に付与した「キーワード候補」に「あいさつ」が含まれているもの，（2）「見出し」の項目に「あいさつ」「ありがとう」「すみません」等の語が含まれているもの。（ちなみに，筆者自身，以前に1970年代の『台帳』の一部からあいさつに関する興味深い記事を抜きだしたことがあったが，その記事は今回検索した記事の中にすべて含まれていた。『台帳』に収録されている記事の中には，分類やキーワードを整備しなければ検索が難しい記事もあるだろうが，テーマによっては見出しだけでもかなり検索が可能なようである。）

2.2. あいさつの言葉の乱れ

あいさつには，出会いと別れの日常的あいさつと，冠婚葬祭などの場合の

特別のあいさつとの二種類がある。今回対象とした新聞記事では，普段のあいさつに関する意見がほとんどを占めている。

あいさつの言葉の乱れについて述べられている意見には，大きく分けて二つの見方がある。一つは，あいさつをすることが期待される場面であいさつしないことを乱れているととらえる見方である。もう一つは，あいさつが必要と思われる場面で何らかのあいさつがされても，そのあいさつの言葉が適切でないとする見方である。詳しい調査をしたわけではないが，『台帳』作成段階で数十年という長い期間の新聞記事を扱い，また，現在も国語関係新聞記事を収集している経験からいえば，あいさつがないことに関する意見は時間の経過に左右されず常にみられる意見であるが，その一方で，何が適切なあいさつの言葉かという意識は時間とともに変化していくようである。

2.2.1. あいさつをしないということ

あいさつが期待される場面であいさつをしないことについて，「あいさつ無しの時代」「あいさつをしない子供たち」「あいさつのない若者たち　“作法知らぬ”　年配者は嘆く」といった見出しの記事が多く見られる。これらの記事はいずれも，ソトの人間関係においてあいさつがないことを否定的にとらえている意見である。

電電公社が1980年に東京・大阪近郊の小学生とその母親それぞれ500人を対象に行った調査によれば，家族に対する「おはようございます」「おやすみなさい」のあいさつはそれぞれ56%，83%の子供が行うのに対して，来客や近所の人に対する「こんにちわ」や友達と別れるときの「さようなら」はそれぞれ49%，36%しか言わないとされている。家族以外の相手に対して出会いや別れのあいさつをしない傾向にある子供達の姿を映すこの調査結果は，あいさつの乱れを訴える投書記事とも一致している。

また，感謝や詫びの言葉が発せられないことについての意見もある。

「ありがとう」一つ言えぬ娘

（略）私からサイフを拾ってもらったのに「ありがとう」の言葉もない。（略）情けないと思った。「ありがとう」ぐらい言えるはずだ。

不快であった。（略）　　（40歳・女性）

（1980年9月8日・東京新聞「発言」欄）

このような，ソトの関係において出会いや別れのあいさつがないこと，また，感謝や詫びの言葉がないことを否定的にとらえる意見は，1970年代を通じて多く見られ，日本の社会におけるあいさつに対する関心の高さ，あるいはあいさつを重要視する新聞の姿勢がうかがえる。

2.2.2.　不適切な表現

あいさつ表現が適切でないと指摘する意見がある。例えば，別れのあいさつとして，「バイバイ」でなく「さようなら」と言うべきだという意見である。また，感謝表現として「すみません」を使うことは好ましくないという意見が多くみられる。

「すみません」「ありがとう」

このごろは「すみません」と「ありがとう」があまり聞けない。それに，使いかたを間違えている。物をあげた時「すみません」というが，あやまらないで「ありがとう」と感謝してほしい。（略）

（60歳・女性）　　（1971年10月28日・東京新聞「発言」欄）

心失っている「すみません」

八百屋の店主が客に向かって「どうもすみません」と言っていた。本来なら「ありがとうございます」と言うべきであり，それが正しい日本語だと思う。「すみません」という言葉の本来の意味は，わびることにある。（略）　　（43歳・男性）

（1975年6月15日・読売新聞「気流」欄）

感謝の意味を表すために「すみません」という言葉を使うことについて，土井（1971）は,「日本人が親切の行為に対し」詫びるのはそうしないと「相手が非礼と取りはしないか，その結果相手の好意を失いはしないかと恐れるからである。（略）そして今後も末永く甘えさせてほしいと思うので，日本人は「すまない」という言葉を頻発すると考えられるのである。」（p.27）と述べている。この『「甘え」の構造』はベストセラーになり，日本人論に

拍車をかけた本であり，人々に与えた影響も大きいと考えられる。しかし，新聞記事に反映された意見をみる限り，1970年代には，感謝表現として「すみません」を使うことは好ましくないという意見が多い。ただし，少ないながらも，感謝表現としての「すみません」を肯定する意見もある。

「すみません」も悪くはない

（略）端的に言って，「ありがとう」には使いにくい面があります。つまり「ありがとう」だけでは，ぞんざいな感じがして，目上の人に使えないということです。　（19歳・男性）

（1976年12月25日・毎日新聞「読者の広場」欄）

感謝表現の「すみません」がどのように使われているか，その使用意識に関する調査がある。国立国語研究所では，1963年に松江において，「国民各層の言語生活の実態調査」の一環として，道を歩いていて落としたハンカチを拾ってもらったときに言うお礼の言葉を調査している。その結果は，アリガトウ型が43%，スミマセン型が31%，併用型が17%である（斎賀1966）。また，スミマセン型使用の最高は10代の45%，最低は60代の14%である。感謝の対象となる事柄には様々なものがあり，ハンカチを拾ってもらった場合の結果から感謝表現一般について述べることはできないが，おおよその傾向としては，年齢が低くなるにつれてスミマセン型が増加しているといえるだろう。先に挙げた19歳男性の意見は，若年層におけるスミマセン型の増加という調査結果を考慮に入れればうなずけるものだろう。

また，柳田（1946）は「言葉も衣服や器物などと同じに，使っているうちにだんだんと古びてしまって，尊敬する人の前には出せなくなる」（p. 430）と述べて，言葉が時間とともに変化していく，いわゆる「使い減り」の現象に言及している。この「使い減り」という視点から，感謝表現の「すみません」について考えてみると，感謝を表す「ありがとう」の言葉が，時間とともに古びてしまって目上の人への言葉としては十分でなくなってきたため，「ありがとう」に代わって「すみません」がよく使われるようになったが，話し手と聞き手との年代差や価値観の相違などによって，感謝表現の「すみ

ません」が不適切とみなされた，といえるのではないだろうか。

2.2.3. 「乱用」される「すみません」と「どうも」

「すみません」という言葉が様々な場面で，詫びや感謝表現，呼びかけ，あいさつとして使われるので，心がこもっていないように思うという意見が見られる。また，「どうも」という言葉についても，いろいろな場面で使用されるので，曖昧で心がこもっていない，非人間的な感じがするという意見がある。

気になる「すみません」の乱用

（略）本来，詫び言葉であることは周知の事実なのに，現在ではまるで万能語のような威力を持ち始めている。（略）この言葉は発言者の立場を必要以上に卑屈にする（略）およそ言語の中で最も美しい言葉である「ありがとう」という言葉を死語にしようとしている（略）（20歳・男性）　（1978年7月26日・サンケイ新聞「私の意見」欄）

しかし，「すみません」という言葉が「心がこもっていない」「発言者の立場を必要以上に卑屈にする」と否定的に見られる一方，応用範囲が広い便利な言葉と肯定的にとらえる意見もある。

便利な言葉

あいまいな言葉かも知れないが「すみません」は，今や日本人の常用，慣用語になって（略）日常会話の中では謙そんの意味も含んでいて，相手方に不快の念を与えない便利な表現だと思う。　（61歳・男性）（1976年12月25日・毎日新聞「読者の広場」欄）

「すみません」という言葉については，発話行為論や語用論，あるいは対照言語学などにおいて多くの研究がなされている。佐久間（1983）は，「すみません」が詫びの意味から様々に転用され，慣用化され，人間関係の潤滑油として機能していると述べている。しかし，「すみません」という言葉の使用意識に関する調査はあまりない。新聞は，メディアの特殊性を勘案しても，社会における言語意識をある程度反映していると考えられ，私達は，新聞記事を資料として使用意識や関心のあり方などをみることができる。

2.3. おわりに

あいさつと感謝・詫びの言葉について，新聞記事に見られる意見を概観してきた。1970年代だけでなく今も変わらずみられる意見は，特にソトの人間関係において，あいさつや感謝・詫びの言葉を発することが大切である，というものである。

また，投書の中で，あいさつは「何でもない言葉」「些細な言葉」「単純なひとこと」などと表現されているが，これらの言葉はあいさつに対する関心のあり方の一端を反映していると考えられる。定型のあいさつ表現は命題内容を伝達するような機能を果たしているわけではないが，人々にとっては，人間関係の調整役として，また，暮しにうるおいをもたせるものとして，必要不可欠なものであると意識されているようである。

投書記事では，具体的な出来事に基づいた意見や感想が述べられることが多い。実際の言語生活の中で、相手との関係や感謝したり詫びたりする対象の事柄等に応じてことばを使い分けていたとしても，投書記事の多くは，言語行動の具体的な一場面を取り上げて，投稿者の規範に照らして意見を述べるタイプのものである。このような新聞記事からは，ある程度の制限と限界はあるにせよ，ある言動行動について話し手の意図・感じ方や聞き手の理解・受け取り方を知ることができる。例えば，感謝表現として「すみません」ということばを使うことに関する投書意見を分析することによって，感謝する対象の事柄の内容，そのことばの使用傾向や許容される度合，そして，それらの移り変わりを知ることができるだろう。

今後は，これまで述べてきた点についてさらに分析をすすめ，新聞記事に反映されたことばに対する価値観や関心のあり方，及び，社会の情勢・動向との関連についても検討する予定である。

参考文献

国立国語研究所（1984）『言語行動における日独比較』（国語研報告80）三省堂
斎賀秀夫（1966）「すなおに「ありがとう」と言おう」『ＩＤＥ』54号，44－45

佐久間勝彦（1983）「感謝と詫び」　水谷修編『講座日本語の表現３：話しことばの表現』筑摩書房
総理府（1992）「国語」『月刊世論調査』11月号，31－52
電電公社（1980）「子供の言葉づかいと電話」
土井健郎（1971）『「甘え」の構造』弘文堂
柳田國男（1946）『毎日の言葉』創元社，（『柳田國男全集19』1990，筑摩書房所収）

3.　「常用漢字表」に関する新聞読者の意識について（辻野　都喜江）

3.1.　概略

本節は，井上・辻野（1992）の第２節（執筆辻野）に続くものである。

前稿では，筆者が『国語年鑑』を元資料として作成した『国語年鑑所収新聞記事データベース』の概略，及び1979年から1988年までの10年間の新聞記事に関する動向について述べた。その結果，〈文字・表記〉に関する新聞記事が年による数の変動が一番大きく，1979年，1981年と突出していたことがわかった。これは，1979年に文部省国語審議会から文部大臣に対して「常用漢字表案」としての中間答申があったこと，そして，1981年３月に「常用漢字表」答申，同年10月に内閣告示があったことと関係する。

1946年（昭和21年）に「当用漢字表」が出されてから1981年（昭和56年）「常用漢字表」が出されるまでの35年間，そして，「常用漢字表」が出されてから現在にいたるまでの12年間の新聞記事を見れば，新聞記事にされたことがらという制約はあるが，漢字に関する社会全体の考え方，また識者・専門家・一般読者の考えのある程度の傾向はとらえることができるだろう[1]。文字・表記の標準化としての漢字政策は，国語教育，日本語教育，マスメディアに大きな影響をおよぼす。過去の傾向をみることは，現在や将来の言語生活や言語文化を考えるひとつのきっかけにもなるだろう。

「0.はじめに」でも述べたように，現在，筆者らは国語研究所に所蔵されている『新聞所載国語関係記事切抜集』（以下『切抜集』）所収記事に関する基礎情報を『国語関係記事台帳』（以下『台帳』）としてデータベース化

する作業をおこなっている。今回の報告では，『台帳』が整備されており，かつ大きな変動のあった1981年の「常用漢字表」に関する新聞への投書記事にかぎって，読者の漢字意識が新聞にどうあらわれているかを調べてみることにする。

3.2. 資料と作業手順について

資料は前述の『台帳』及びその元資料である『切抜集』である。しかし，現時点における『台帳』には細かい記事の内容を表すキーワード的な情報が含まれていない。そこで，筆者は『切抜集』の1981年分のすべての記事について検討し，〈文字・表記〉に関する新聞記事をとりだすために，独自に『台帳』に三つの検索項目を追加した。追加したのは，次にあげるａ～ｕまでの「キーワード候補」，そして「性別」「年齢」である。

記事につけられた『見出し』をさらに内容分類するために，便宜的に「キーワード候補」という名の仮の検索項目をたて，次のように下位分類した。

ａ「文字」

古代文字，木簡，マンガ字（丸字）などに関する記事。

ｂ「表記」

文字を用いておこなう語の書き表し方などに関する記事。

ｃ「漢字」

ｄ「平仮名」

ｅ「片仮名」

ｆ「ローマ字」

ｇ「記号」

ｈ「活字」

印刷の活字を大きく，といった内容の記事。

ｉ「字体」

ｊ「書体」

楷書，行書，草書，明朝体，ゴチック体などに関する記事。

ｋ「仮名遣い」

l「送り仮名」

m「外来語表記」

n「ルビ」

o「縦書き」

p「横書き」

q「表示」

マーク，標識，日本語表示などに関する記事。

r「読み書き」

漢字の読み方，筆順，書き方，書写などに関する記事。

s「情報機器」

文字とコンピュータ，ワープロ，タイプライターなどのかかわりに関する記事。

t「国語政策」

国語審議会，教育課程審議会など，文部省内に設置されている会議に関する記事。また国語政策に対する意見など。

「常用漢字表についての投書記事」を抽出するにあたっては，まず，上に述べた「キーワード候補」の中から「c：漢字」「u：国語政策」の二つが付加されている投書記事を『台帳』で検索し，その中から見出しなどをもとに「常用漢字表」についての記事を抽出する。このようにして抽出された投書記事は74件であった。この74件について，実際に『切抜集』の記事を見て，その内容について検討した。

3.3. 投書における「常用漢字表」についての意見

まず，投書記事74件について，内容別に八つの下位分類をおこなった。（ひとつの記事の内容が複数の分類項目にまたがっている場合は重複して分類した。）そして，投書した人の年齢を10代から80代まで10歳間隔で年齢別に集計した。その結果が表1である。

表1　「常用漢字表」についての内容及び年齢別投書記事件数

内容＼年齢	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	不明	合計
投書者数	4	7	5	12	15	14	11	1	5	74
漢字の復活	1	1	3	2	1	1	3		1	13
漢字増										
賛成	2	4	1	5	5	5	5		2	29
反対		1		1	3	1	1		1	8
「目安」について		1					1			2
仮名書き	1				1					2
決め方				1	1					2
国語教育	2	3	1	6	5	3	2	1	1	24
漢字をいじるな		1		1		2	1			5
その他			1	1	2	4	2		1	11
合計	6	11	6	17	18	16	15	1	6	96

特に説明を要する分類項目について少し述べておこう。

〈漢字の復活〉は，「常用漢字表案」（中間答申）にはなかった漢字が「常用漢字表」（答申）で復活したことについての意見である。

〈漢字増〉は，1946年の「当用漢字表」1850字に対し，今回調査の対象にした「常用漢字表」で1945字に増えた。この漢字数の増加について，国民が使用する漢字の数を増やすことに賛成か反対かの意見である。（歴史的にいえば，明治5年8月に学制が発布，義務教育制度が実施された前後から漢字節減案が出始めた。明治30年代になって，上田万年らが中心となって「帝国教育会国字改良部」を設立し，明治34年，漢字制限の標準が決定された。このようにして漢字制限が歴史にあらわれた。）

表1のうち投書件数の多いものについて具体的に見てみよう。

まず，「漢字の復活」についてであるが，これは「常用漢字表」に「朕」「帥」などが入ったことに関する意見である。中でも70代の男性の意見が目立った。その内容は，

「死字とも言えるこれら（朕，侯，爵，奴，隷）の漢字が『国民の言語生活を長い間支配する』（福島慎太郎会長）。この『表』に復活していることは，時代錯誤と思われる。しかし，この『表』は，逆行しようとする時代の風潮を反映しているように思われる」（男31歳）

（３月29日・西日本新聞）

「『朕』の復活のねらいは何か，この復活がつぎに何をねらっているのかは明白だと恐れざるをえない」（男74歳）

（３月27日・毎日新聞）

「主権在民の日本でこれが常用漢字といえるのか，『朕』など不要な文字が多過ぎ，露骨な反動化で国民一般や中学生たちを困惑させている」（男77歳）（３月30日・北海道新聞）

といったものであった。また，16歳の女子生徒は，

「『爵』『帥』『朕』『嚇』が，なぜ今ごろになって学校の授業に登場しなければてらないか，納得ができない。ただでさえ漢字は，意味もろくにわからないままの丸暗記というのが現状である」（女16歳）

（3月30日・北海道新聞）

という意見を寄せ，直接影響を受ける教育現場の実態を報告している。これらの投書には「朕」「帥」の類の漢字の復活に関する賛成意見はなかった。また，それ自体は投書記事ではないが，北海道新聞の4月1日付朝刊「３月の投書から」には，

「常用漢字『朕』復活などに疑問あり」

という見出しで，

「漢字」（常用漢字表）についての国語審議会の答申では一部年配層から「賛成」の意見が寄せられましたが，「朕」「帥」「爵」などの復活に「なぜ」と疑問を持つ投書がほとんどをしめました。

という内容の記事が掲載されている。

第二に，投書件数の多い「漢字増」については「賛成」「反対」の二つに分けてみた。

「漢字増賛成」というのは，「常用漢字表」で使える漢字を増やすことに賛成，あるいはさらに増やすことを望む意見であり，漢字増反対派よりかなり多くの件数になっている。例えば，

「漢字教育に思う　学習漢字追加あまり負担ない　母国語の勉強もっとおおらかに」(男42歳)　（9月10日・読売新聞）

「漢字教育に思う　生活に必要な漢字の習得は当然」（男20歳）

（9月10日・読売新聞）

といった見出しがあり，「常用漢字」を実施すると，覚える時は多少の負担があってもそれ以後の学習に必ずプラスになるという内容の意見が多かった。

また，「漢字増反対」というのは，「常用漢字表」が出されるまでの「当用漢字表」の線をこえないのがよいという意見である。例えば，

「当用漢字の再評価望む」（男67歳）　（3月29日・朝日新聞）

「ふえた漢字　当用漢字の徹底教育が大切では」（男52歳）

（4月9日・毎日新聞）

「今以上の漢字増はごめんだ」（男23歳）　（9月6日・北海道新聞）

の見出しで，常用漢字の実施は漢字学習において負担が大きく混乱をまねくという意見であった。

また，

「漢字偏重も困るが軽視なおおかしい」（男45歳）

（4月1日・朝日新聞）

という見出しで「漢字軽視は文化的なるものの属性を否定している点，注目したい」とする意見もあった。

第三に「国語教育」についてであるが，教育漢字の根本的な見直しや，漢字学習の方法を提案するような意見である。漢字の問題はやはり教育とふかくかかわっており，分類の上でも，

「漢字の復活」（重複件数４）

「漢字増賛成」（重複件数７）

「漢字増反対」（重複件数４）

などと重なっていることが多い。具体的な見出しでは，

「ふえた漢字　子供が自分で学びとる力育てよ」（男53歳）

（４月９日・毎日新聞）

「日常から習うより慣れよう　根気強く“字引魔”育てる努力を」

（女31歳）　（９月29日・読売新聞）

といったものがある。おおらかでゆとりある漢字教育を地道におこなうよう努力していく必要性について述べた意見がめだった。

第四に「漢字をいじるな」についてであるが，

「敗戦前のままで通用するものを何を好んで変更する必要があるのか」

（男76歳）　（４月３日・サンケイ新聞）

「国は漢字増減のような大問題には触れず自然の推移のままにとするのがよい」（男65歳）　（９月27日・西日本新聞）

とする意見である。その内容は，「漢字増賛成」と多く重なり合っている。この意見の大方は，「漢字は国民の皆が使うものだから，国が漢字の増減をきめるのではなく，国民の選択にまかせておけばよい」とする意見であった。中には，

「字体を，みだりに改変するな」（男45歳）（５月18日・サンケイ新聞）

という見出しで「従来の歴史ある正字体を正字として尊重すべきである」とする字体変更に対する反対意見もあった。

これまで四つの項目についてみてきたが，件数の多い「その他」についても若干検討してみよう。その中には，

「漢字審議，学者官僚中心を排せ」（男46歳）（５月４日・サンケイ新聞）

の見出しで国語審議会に対する注文を述べたものや，国語辞典や法令用語などに対する常用漢字利用法を述べたものもあった。

「漢字はできるだけ簡略にして欲しい」（男65歳）

（12月22日・朝日新聞）

「日本語表記はやさしく素直に」（男66歳）（4月22日・北海道新聞）

といった文字・表記の簡素化について述べているものもあれば，

「漢字に限らず「ゑ」も復活を」（女67歳）（4月1日・北海道新聞）

というようにひらがなの制限の緩和を求めているものもあった。

このように，「常用漢字表」が出たことは社会にさまざまな問題を提起している。

全体を通して見ると，投書件数では「漢字増」に賛成，すなわち「常用漢字表」に賛成とする意見が多かった[2]。しかし，「朕」や「帥」のような復古的な漢字の復活に対しての不安や，教育の場での学習の負担を懸念する意見を含みながらの「常用漢字表」賛成であるとみなすべきであろう。影響をうける教育の現場，あるいは，文筆家などからは，八つの分類項目全般にわたって意見が述べられていた。

今回調査の対象とした74件に関しては，世代による内容の差はほとんどみられなかった。ただし，30代以下の読者の声は少なかった。また，今回，「性別」の検索項目を追加して調査分析をおこなってみたが，女性の投書件数が少なかったため，男女差による内容の違いはとりたてて分析しなかった。

なお，今回調査の対象にした投書記事74件は紙数にして7紙になるが，特にサンケイ新聞と北海道新聞の記事の割合が多いことを付記しておく。

3.4. 今後の課題

以上，1981年に出された「常用漢字表」に関する新聞読者の意識について見てきたが，では，「当用漢字」を使用していた時代の読者の漢字に対する意識はどうであったのだろうか。戦後まもない時代は，新聞での投書欄のスペースは小さく，とりあげられている投書の数も今とくらべてずいぶん少ない。言葉づかいや漢字についての投書もまれである。

しかし，「当用漢字表」や「現代かなづかい」「当用漢字字体表」「人名用漢字別表」などが出された直後には，国語審議会や教育関係者に対する意見，また，決定事項と教科書との関係にふれた意見などが見られる。1949年

8月に国語審議会が文部大臣に「中国地人名をカナ書きに」と建議した問題については数か月にわたって，投書のみならず，社説やコラム，一般記事でも多くとりあげられている。投書ではないが，1966年頃には，西日本新聞では「漢字教室」という欄をもうけて，具体的な字体についての講座的な記事を週一回の割合で連載している。また，同じ頃，「漢字制限離れ」も相当あったとみえ，「制限の無視が目立つ，より保守的な月刊誌」という見出しの記事もある。

1981年以降においても「常用漢字表」と義務教育における漢字学習，外国人に対する日本語教育の中での漢字教育，情報機器（コンピュータ・ワープロ等）使用による漢字の誤用や漢字の多用化，縦書き・横書き，筆順など，社会情勢の変化とともに漢字に関するさまざまな問題が生じている。そして，漢字に関することがらが新聞記事でとりあげられることも多くなってきている。

このような変化は，『台帳』の整備が進めば，よりはっきりしたかたちで傾向がみえてくると思われる。筆者としては，今後も『台帳』の整備をおこなう一方で，新聞記事にあらわれた国民の漢字に対する意識の変遷について調査を進めていくつもりである。

注

1　当用漢字や現代かなづかいなど，戦後の一連の国語施策に対する国民の知識や意見は，国立国語研究所報告29（1966）の『戦後の国民各層の文字生活』の中の「戦後の国語施策が国民の文字生活の及ぼした影響とその経路に関する調査研究」にまとめられている。調査は1963年（昭和38年）におこなわれ，東京と長岡の小中学生の母親，会社員への質問調査，新聞投書，個人の文書など，多数の資料をもとに，年齢，職業，学歴などの違いからみた，こまかい分析がなされている。

2　『言語生活』1981年7月号（特集：常用漢字表）で，野村雅昭氏（当時国立国語研究所員，現在早稲田大学日本語研究教育センター教授）は，「常用漢字表の投じたもの－マスコミの反響をおって－」と題して，答申後約一ケ月間のテレビ，新聞などマスコミの反響をまとめている。その中で新聞に投稿された32

通を，「主観的に」という注釈つきで分類している。そこには，反対16，条件つき賛成７，賛成９の表があげられていて，「賛成と反対がくしくも同数なのは，新聞社の配慮のあらわれともみられます。」と述べている。「新聞社の配慮」は，新聞記事を資料とした研究においては常に念頭においておかなければならないことである。

参考文献

井上　優・辻野都喜江（1992）「「国語関係新聞記事データベース」について」『研究報告集13』（国語研報告104）

国立国語研究所（1966）『戦後の国民各層の文字生活』（国語研報告29）

野村雅昭（1981）「常用漢字表の投じたもの－マスコミの反響をおって－」『言語生活』７月号